

和歌八動書

通名風  
心外  
毛抄  
終

和書門類			
二	一	二	二
冊	四	八	五
架	函	函	號
二五八五			

內閣文庫		
二	二	二
函	冊	冊
二五八五		
和書類		

內閣文庫	
番號	和 25855
冊數	2 ( 2 )
函號	202 78



...の...年...  
...の...  
...の...  
...の...  
...の...  
...の...  
...の...  
...の...  
...の...  
...の...  
...の...  
...の...

皇  
室  
御  
筆

内  
閣  
記  
録  
局  
長  
官  
御  
筆

淺  
草  
文  
庫

和  
學  
講  
談  
所

青  
籙  
部  
取  
調  
士  
入  
用  
御  
筆  
遣  
出  
月  
日  
内  
閣  
記  
録  
局  
長  
官  
御  
筆

はつとえ人のたつとては道はつとて  
ゆゑとて道の者もなるとはつとて  
自らのつとて毎日のつとてはつとて  
定古細このつとてはつとてはつとて  
あの人よとお志お志の定をてはつとて  
為明のつとてはつとてはつとてはつとて  
兼好ええとてお志とてはつとてはつとて  
道業つとてはつとてはつとてはつとて  
影何とてはつとてはつとてはつとて  
三つとてはつとてはつとてはつとて  
つとてはつとてはつとてはつとて

つとてはつとてはつとてはつとて  
感とてはつとてはつとてはつとて  
あつとてはつとてはつとてはつとて  
つとてはつとてはつとてはつとて  
あつとてはつとてはつとてはつとて  
つとてはつとてはつとてはつとて  
つとてはつとてはつとてはつとて  
つとてはつとてはつとてはつとて  
つとてはつとてはつとてはつとて  
つとてはつとてはつとてはつとて  
つとてはつとてはつとてはつとて  
つとてはつとてはつとてはつとて  
つとてはつとてはつとてはつとて  
つとてはつとてはつとてはつとて  
つとてはつとてはつとてはつとて  
つとてはつとてはつとてはつとて

いとてことごとくはらへりてはてはもと其清神  
れとてさうらんたふさかすべし一 徳のたむけ道  
場又ありしはなまをりてはたもやいふ  
祀月五人のあひまのいふことよ  
ふ會合のあひまのいふことよ  
ふ會合のあひまのいふことよ  
ふ會合のあひまのいふことよ  
あつてさうらんたふさかすべし一 徳のたむけ道  
場又ありしはなまをりてはたもやいふ  
祀月五人のあひまのいふことよ  
ふ會合のあひまのいふことよ  
ふ會合のあひまのいふことよ  
ふ會合のあひまのいふことよ  
あつてさうらんたふさかすべし一 徳のたむけ道  
場又ありしはなまをりてはたもやいふ  
祀月五人のあひまのいふことよ  
ふ會合のあひまのいふことよ  
ふ會合のあひまのいふことよ  
ふ會合のあひまのいふことよ

唯ふくはりてはてはもと其清神  
れとてさうらんたふさかすべし一 徳のたむけ道  
場又ありしはなまをりてはたもやいふ  
祀月五人のあひまのいふことよ  
ふ會合のあひまのいふことよ  
ふ會合のあひまのいふことよ  
ふ會合のあひまのいふことよ  
あつてさうらんたふさかすべし一 徳のたむけ道  
場又ありしはなまをりてはたもやいふ  
祀月五人のあひまのいふことよ  
ふ會合のあひまのいふことよ  
ふ會合のあひまのいふことよ  
ふ會合のあひまのいふことよ  
あつてさうらんたふさかすべし一 徳のたむけ道  
場又ありしはなまをりてはたもやいふ  
祀月五人のあひまのいふことよ  
ふ會合のあひまのいふことよ  
ふ會合のあひまのいふことよ  
ふ會合のあひまのいふことよ

とていふことなれば一ありてはさういふことなれば  
このことなればさういふことなればさういふことなれば  
さういふことなればさういふことなればさういふことなれば  
さういふことなればさういふことなればさういふことなれば  
さういふことなればさういふことなればさういふことなれば  
さういふことなればさういふことなればさういふことなれば  
さういふことなればさういふことなればさういふことなれば  
さういふことなればさういふことなればさういふことなれば  
さういふことなればさういふことなればさういふことなれば  
さういふことなればさういふことなればさういふことなれば

さういふことなればさういふことなればさういふことなれば  
さういふことなればさういふことなればさういふことなれば  
さういふことなればさういふことなればさういふことなれば  
さういふことなればさういふことなればさういふことなれば  
さういふことなればさういふことなればさういふことなれば  
さういふことなればさういふことなればさういふことなれば  
さういふことなればさういふことなればさういふことなれば  
さういふことなればさういふことなればさういふことなれば  
さういふことなればさういふことなればさういふことなれば  
さういふことなればさういふことなればさういふことなれば  
さういふことなればさういふことなればさういふことなれば





そのあつたまはとらふゆゑありては集  
一 女房のちかづれゆゑにまよがま  
ゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに  
百もれらるゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに  
ゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに  
ゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに  
ゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに

一 後元嚴院殿ありてのゆゑにゆゑに  
ゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに  
ゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに  
ゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに  
ゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに  
ゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに

おもむいたまはとらふゆゑあり

一 尾羽ありてゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに  
ゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに  
ゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに  
ゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに  
ゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに  
ゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに

一 中よりゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに  
ゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに  
ゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに  
ゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに  
ゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに  
ゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに



そとへしとてはしるすてはしるす  
ぬおよきかへとてはしるすてはしるす  
かへん中へしるすてはしるす  
てはしるすてはしるす  
とてはしるすてはしるす  
よとてはしるすてはしるす  
もてはしるすてはしるす  
りてはしるすてはしるす  
りてはしるすてはしるす  
神ありてはしるす  
らへしるす

又もてはしるす  
ゆへしるす  
りてはしるす  
てはしるす  
みはしるす  
はしるす  
こへしるす  
一源氏後夜ふとのちとてはしるす  
しへしるす  
一本よりはしるす  
かへりてはしるす  
執撰

いほばあつたよふにふりかへしあつたは他をい  
今も初花を載新にふりかへしあつたは  
いほばあつたよふにふりかへしあつたは  
いほばあつたよふにふりかへしあつたは

いほばあつたよふにふりかへしあつたは  
いほばあつたよふにふりかへしあつたは  
いほばあつたよふにふりかへしあつたは  
いほばあつたよふにふりかへしあつたは  
いほばあつたよふにふりかへしあつたは

いほばあつたよふにふりかへしあつたは  
いほばあつたよふにふりかへしあつたは  
いほばあつたよふにふりかへしあつたは  
いほばあつたよふにふりかへしあつたは  
いほばあつたよふにふりかへしあつたは

いほばあつたよふにふりかへしあつたは  
いほばあつたよふにふりかへしあつたは  
いほばあつたよふにふりかへしあつたは  
いほばあつたよふにふりかへしあつたは  
いほばあつたよふにふりかへしあつたは

一 此の文は...  
一 此の文は...  
一 此の文は...  
一 此の文は...  
一 此の文は...  
一 此の文は...  
一 此の文は...  
一 此の文は...  
一 此の文は...  
一 此の文は...

一 此の文は...  
一 此の文は...  
一 此の文は...  
一 此の文は...  
一 此の文は...  
一 此の文は...  
一 此の文は...  
一 此の文は...  
一 此の文は...  
一 此の文は...



あつた

いづれは海の方より神よきと云ふ

あつた

鹿のふかきうらたのふかき花の宿ま

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あ

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あ

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

報

すまのらるる せまのらるる せまのらるる  
せまのらるる せまのらるる せまのらるる  
せまのらるる せまのらるる せまのらるる

一割のほり

せまのらるる せまのらるる せまのらるる  
せまのらるる せまのらるる せまのらるる  
せまのらるる せまのらるる せまのらるる  
せまのらるる せまのらるる せまのらるる

せまのらるる せまのらるる せまのらるる  
せまのらるる せまのらるる せまのらるる  
せまのらるる せまのらるる せまのらるる

せまのらるる せまのらるる せまのらるる  
せまのらるる せまのらるる せまのらるる

せまのらるる せまのらるる せまのらるる  
せまのらるる せまのらるる せまのらるる

せまのらるる せまのらるる せまのらるる  
せまのらるる せまのらるる せまのらるる

せまのらるる せまのらるる せまのらるる  
せまのらるる せまのらるる せまのらるる

せまのらるる せまのらるる せまのらるる  
せまのらるる せまのらるる せまのらるる

せまのらるる せまのらるる せまのらるる  
せまのらるる せまのらるる せまのらるる

しよ末のるれよのまひすし  
とゆふよふのりくはるまよた徳屋  
百とよと定家。まよのま柳のまゆ  
とよま柳のりくをんまよと

一申くのまひす

水久保元年八月十日申定家判云  
ありとあり合ととそは徳屋文水  
年九月十三夜為家判ありあり  
とつれをてもとるりくこと非せ  
る皆まありとけれまよまら  
うへつれ

あ

申務の親王まよと百首の合まよ  
判云ありととつれまよとつれまよ  
とよま合とつれまよと

西のまられ みのつれありとれ

あひとと かつとつれ ありとつれ

まよはつれ ありとつれ 花つれも

みゆとつれ ありとつれ

とつれとつれまよとつれは服抄

とつれとつれ

あ

嘉永二年十月任職乃く多事  
後成判之由一々にすけり故  
とふ事の御よあはれ申す  
よし申すあはれも御よし  
まゝの御事より御事  
ろく一二年石舟將家より御判  
よかろし御事御事御事  
彦吉の御事

嘉永二年十一月廿八日  
後成御判之由一々にすけり  
とふ事の御よあはれ申す  
よし申すあはれも御よし  
まゝの御事より御事  
ろく一二年石舟將家より御判  
よかろし御事御事御事  
彦吉の御事



ふとあらぬもやうな合算の事  
は月日の別を以てくの時もいふ  
ともどもはほどもは御控を  
さすやゆふん十の百書は合判を  
指すといふ事かのみといふ事  
は御控に記しおしすは御  
とせしめし御控に記しおしす  
は御控に記しおしすは御  
は御控に記しおしすは御  
おれあはれ

御控より合後御判を以ておしす  
は御控に記しおしすは御  
は御控に記しおしすは御  
御控に記しおしすは御  
を以ておしすは御判を以て  
の御判を以ておしすは御  
ありし御判を以ておしすは御  
さすは  
まのたられ 其のあはれ  
六百書判を以ておしすは御  
は御判を以ておしすは御

手紙の返事

〇〇〇〇

平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状

〇〇〇〇

平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状

建永二年九月廿二日  
後醍醐天皇御前  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状

平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状  
平賀仙舟の書状

てまゝくろむハ侍あしハふし相をれ  
まふいふゆてゆふふまふまふ  
の相をれくしていふおふりあふ  
もや又文永二年ハ百官官方者  
まふまふの相あふりあふりあふり  
相まふまふ

うあふり  
六百番のうあふり  
まふまふの相あふり  
まふまふの相あふり  
まふまふの相あふり

まふまふ  
六百番のうあふり  
まふまふの相あふり  
まふまふの相あふり

まふまふ  
まふまふの相あふり  
まふまふの相あふり  
まふまふの相あふり  
まふまふの相あふり  
まふまふの相あふり  
まふまふの相あふり  
まふまふの相あふり

まふまふ



ふりかへ

新徳野より命し信成の御書

さしづの御書

あつら

あつらわねの御書

元年九月より命し信成の御書

あつらわねの御書

あつらわねの御書

あつらわねの御書

らぬ

永享二年重家朝臣より命し

信成の御書

あつらわねの御書

あつらわねの御書

あつら

あつらわねの御書

あつら

あつら

あつらわねの御書

あつら

あつら

たし

御前  
御座り候

あ

あ

御座り候

御座り候

御座り候

御座り候

御座り候

御座り候

御座り候

御座り候

御座り候

御座り候

御座り候

御座り候

御座り候

御座り候

御座り候

御座り候

御座り候

文永二年九月廿三日  
 判官の  
 内書  
 等不可為指南  
 見

此一卷道之教等  
 其他之間  
 書遺松田冊列者  
 也老老事  
 等不可為指南  
 見

嘉慶元年十一月十二日  
 准三張判

後普光園抄改殿